

## ランマドー さびれた「王大道」

山形洋一

**第二次英緬戦争に備えたビルマ王の戦略道路は敗戦で寂れ、南の中華街と北の武家屋敷の間に、近代国民教育発祥の「本町高校」が建つ。**

中央駅から西へ（外回り）二つ目の駅がランマドーである。線路の両側は切り通しで、上を走る通りに、サイカーがいつも数台止まっている。

ランマドーとは「王様の大路」の意味で、コンバウン朝第8代タラワディーTharawaddy王（在位1837年—1846年）が、来るべき第二次英緬戦争に備えて1841年シュエダゴン・パゴダを要塞化したとき、要塞と港を結ぶ王専用の道として建設した。

第二次英緬戦争後に英国による本格的な植民地化が進むと、Godwin Roadと改称され、港の



ある下町から北に向かう数少ない道のひとつとなったが、19世紀末には放置され、市内で最も不潔な「疫病の巣窟」と呼ばれるようになった。

ビルマ独立後「ランマドー」の名前が復活するが、王室はすでに滅び、駅周辺には医科大学や総合病院が誘致された。

ランマドー駅。跨線橋にサイカーが待機している。

駅から南には短冊形の商業地区（ダウNTOWN）があり、華僑が多く住み着いた。「穏やかな月」を意味するラタ町（Latha）町と呼ばれ、英語ではLatter Streetと綴られるが、それに対してFormer Streetがあるわけではない。東西に延びるマハ・バンドゥーラMaha Bandoola大路には華僑系の貴金属店が並び、ラタ通りとの角には「観音古廟」がある。清朝

末期の光緒皇帝 13 年（1886 年、明治 19 年）に建立された仏寺だが、中には孔子や関帝の像も置かれ、仏儒道いずれの信仰にも対応できる。

21 番街あたりには「唐人区旅館」の古看板や、中国刊行の家庭雑誌を売る煤けた本屋があり、不思議な時空に迷い込みたい人にはお勧めだ。

駅から北への道は「ミョーマ・チャウン通り」と呼ばれる。その名のもとになった「本町学校」は、地元の素封家ウ・バ・ルウィン氏（1892-1968）による創建で、学校と言えば欧米系のキリスト教ミッションスクールか、伝統的な仏教の僧院しかなかった当時、はじめてできたビルマ語による近代教育の場として、貧家の子女にも広く開放された。



1965 年の社会主義政策で学校はすべて国有化され、ここも基礎教育高等学校

(B.E.H.S.) の番号が付けられたが、学校の表示板には括弧つきで（ミョーマ・チャウン）と、昔ながらの名前が併記されている。金持ちや有力者の子弟が集まるミッションスクールにも引けをとらない、土着の名門校として、今でも庶民には人気があるそうだ。

そこからさらに北には、英領時代にシュエダゴンの丘とチミンダインの港を結ぶ軍事拠点であった関係で、今でも軍関連の建物が多く、江戸の武家屋敷町もこうだったかと思わせる黒く厳めしい建物が、広く間をとって並んでいる。

本町高校設立者ウ・バ・ルウィン氏（校内の銅像）

ミョーマ・チャウン校の裏（西）にあるパドンマー Padonmar Street（仮訳「蓮華通り」、旧称 Budd Road）に入ると、どこの田舎町にもありそうな飯屋、八百屋、貸本屋、DVD 屋などが並び、生活臭が感じられてホッとするが、その先にはダゴン町の警察署や黒塗りの裁判所が厳めしく構えていて、また居心地が悪くなる。（了）